

## 当院検査部の TQM への取り組みとその効果と課題

◎井上 望世<sup>1)</sup>、井上 信行<sup>1)</sup>、川本 光江<sup>1)</sup>  
愛媛県立中央病院<sup>1)</sup>

### 【はじめに】

TQM(Total Quality Management)は企業が製品やサービスの品質を向上させるために活用される改善活動の手法である。医療における TQM 活動は、患者サービスの質向上を目的としている。当院では 2012 年に改善推進本部が設置され、毎年 TQM サークル活動が行われている。今回は当検査室でのこれまでの取り組みとその効果や今後の課題について報告する。

### 【TQM サークル活動の概要】

実際の活動は、QC ストーリーの 7 つのステップ「1.テーマの選定,2.現状把握と目標設定,3.活動計画,4.要因解析,5.対策の立案と実行,6.効果の確認,7.標準化と管理の定着」や QC 手法を用いる。これらは、データを集め課題点を特定し、合理的、科学的、効率的、効果的に問題を解決するための方法である。1 年の間にサークルで実施し、院内での発表大会で結果を報告している。

### 【検査部での活動内容】

検査部では過去 11 年間で 12 サークルが活動を行った。テ

マは時間外業務に関することが 5 サークル、各部門に関することが 5 サークル、その他 2 サークルであった。当日一部を紹介する。

### 【まとめ】

TQM 導入後の効果としては検査部が提供する品質の向上や改善意識の向上である。また、TQM 活動に取り組むことで職員がより質の高い医療を提供することに意識が向き、結果的に病院全体の信頼性の向上につながった。TQM による改善活動はボトムアップ型の活動であり、現場の様々な意見を反映できる。さらに TQM は、人材から人財を育成することのできる活動である。今後はサークルメンバーだけでなく検査部全体で TQM 活動を行っていく意識が必要である。これからも検査部での活動を通して病院全体の医療・患者サービスの質向上を目指していきたい。

<連絡先> 愛媛県立中央病院 089-947-1111(内線 2306)

## Web 会議システムを活用した、山口県臨床検査技師会新人研修会の実践

### グループワークの取り組みについて

◎中杉 義男<sup>1)</sup>、安岡 佳成<sup>2)</sup>、岡田 宏之<sup>3)</sup>、楢林 秀記<sup>4)</sup>、渋谷 秀美<sup>5)</sup>、猪俣 啓子<sup>6)</sup>  
総合病院山口赤十字病院<sup>1)</sup>、山口県済生会下関総合病院<sup>2)</sup>、JA 山口厚生連 周東総合病院<sup>3)</sup>、萩市民病院<sup>4)</sup>、地方独立行政法人  
山口県立病院機構 山口県立総合医療センター<sup>5)</sup>、学校法人 純真学園大学<sup>6)</sup>

#### 【はじめに】

山口県臨床検査技師会では、新入会者を対象に「新人研修会」を毎年開催し、技師会についての理解を深めると共に、会員同士の横の繋がりを持つ事を重視し、グループワークにも力を入れている。従来は参集型で行っていたが、令和3年度はコロナ禍で Web 形式での開催となった。今回は、特にグループワークを Web 形式で行った経験を報告し、参集型との比較、問題点を考察する。

#### 【新人研修会の概要】

例年の参集型では、技師会事業内容説明、先輩技師の話、昼食を交えた自己紹介、ミニレクチャー、グループワークの一日研修で開催している。今回の Web 形式では半日に短縮し、事業内容説明、先輩技師の話、自己紹介の後、ミニレクチャーで終了する事も検討したが、全員参加型の研修を目指し、ブレイクアウトルームを利用してのグループワークを行うこととした。

#### 【Web 形式でのグループワークと参加者アンケート】

参加者を 5~6 人ずつの 6 グループに分けてブレイクアウ

トルームを作り、ファシリテーターとして技師会理事を 1~2 名配置した。実施内容は、「積み上げ自己紹介」でアイスブレイク、「ネガポジ変換ゲーム」で気持ちや考え方の切り替えをしてメンタルを安定させる練習、「山口県名を考えるワーク」でノンテクニカルスキルを磨く練習を行った。

研修会後のグループワークに対するアンケートでは、「ユーモアのある課題で楽しめた」、「同期と顔合わせ出来て良かった」、「もっと積極的に話せばよかった」などの意見があり、参加者の反応も良好であった。

#### 【考察】

研修者同士の交流が可能な参集型研修と異なり Web 研修は参加者間の交流が困難なため、会員の横の繋がりを作る研修の目的を達成するためにはさらなる工夫が必要である。一方で、ブレイクアウトルームを活用したグループワークは Web 研修の手法として有用であることが実感できたことから、今後も参集型と Web 形式の長所を活かした研修会を企画したい。 連絡先：083-923-0111（内線 1200）

## 機器停止時における検査センターとの相互協力体制の構築

◎加賀山 久明<sup>1)</sup>、伊加 智恵<sup>1)</sup>、瀧元 香奈<sup>1)</sup>、木浦 大典<sup>1)</sup>、森 紗季<sup>1)</sup>、松本 詩織<sup>1)</sup>、荻原 宏俊<sup>1)</sup>、藤岡 克徳<sup>1)</sup>  
公益財団法人 操風会 岡山旭東病院<sup>1)</sup>

### 【はじめに】

臨床検査室において BCP (Business Continuity Plan) の策定は検査業務の継続性を確保するために非常に重要である。新型コロナウイルス感染症の流行によるマンパワーの枯渇や業務量の急増などを経験し、BCP の必要性が高まっている。特に、停電や機器故障による分析停止は事業停止につながり易く、当検査室でも対応策を策定していたが、分析停止の原因や復旧までの時間は様々であるため、対応策の選択と決定が困難であった。

(株)岡山県医学検査センター (以下 OML) と協力することで、機器停止が 30 分以上になる可能性がある状況で、共通の手順を確立することが出来たので紹介する。

### 【方法】

院内で測定している生化学項目については、OML との間で依頼コードを設けている。外注による緊急対応は、前半パートと後半パートに分け、それぞれの目標時間を 1 時間に設定している。

前半パートでは、分析停止状態が 30 分以内に解除できな

いと判断した場合、検査技師が検査システム上で外注検査に院内オーダーを切り替える。OML と当院の移動時間は約 30 分を要するため、検査技師が検体を持ち込むことで集荷に要する時間を短縮している。その後、30 分間隔で集荷と持ち込みを繰り返している。

後半パートでは、検体到着から FAX による結果報告までの目標時間を 1 時間以内とお願いしている。

### 【結果】

分析停止に対するシミュレーションは、年に 1~2 回実施しているが、平均で約 2 時間半を要した。

### 【まとめ】

生命維持に必要な緊急項目として、ドライケミストリー法や簡易法キットなどの検査能力を院内で確保することは必要である。一方で ISO 15189 や精度管理による標準化が進んでいる現代においては、検査室間が相互に協力することで緊急時対応の幅が広がる。シミュレーションを重ねることで目標時間に近づけていきたい。

連絡先 086-276-3231